

おやじの病氣は一向よくなりません。村の先生に容体を聞いても一向はつきりしない。むすこが一日野良を休んで、町の病院まで診察につれて行つた。結果は入院しなければいけないと云われた。そこで蒲團は勿論のこと、鍋、釜、まき、炭、米、味噌、野菜など牛車につみこんで、5里の山道を運んで行つた。おやじとおつかあは車の上で、むすこは車の前に立つて引綱を引いて行つた。

おつかあは今日から病院で新世帯を始める。よくしたものでこの病院は、大勢で而も個々に炊事が出来るように万事都合よく出来ている。

看護婦さんは検温器をくばつて、脈をとるだけが仕事らしい。むだな話はするが一向病氣に

対する注意は與えてくれない。注射にだけは勢いよく來てくれる。

朝、晝、夜のたきつけの煙はどの部屋からも上り、廊下をたなびく。煙と一緒に隣り近所のつきあいも早速に始り、親密を加えてゆく。むすこは5日に一度食糧を運ぶ。

木賃ホテル病院

入院料は木賃ホテルなみで安い。病人は快的だかどうだか知らないが、田舎者には日常の生活の延長で手頃である。院長先生は親切だが、なんだかこわくて近ずきにくい、ペコペコ頭を下げるだけで日が経つてゆく……。

こんな病院があつたそうだと昔語りになる時代はいつだろう。(E・H)